

地域包括ケアシステムに活かすソーシャルインクルージョンを実現する構造要因の検討 その1 —実家の茶の間“紫竹”の取り組み—

大屋愛里¹⁾、高野晃輔²⁾、佐藤純子³⁾、西川薫¹⁾、杉本洋¹⁾、
紅林祐介¹⁾、石上和男²⁾、金谷光子¹⁾、遠藤和男⁴⁾

- 1) 新潟医療福祉大学 看護学部
- 2) 新潟医療福祉大学 医療経営管理学部
- 3) 元新潟医療福祉大学 看護学部
- 4) 新潟医療福祉大学 健康科学部

【背景・目的】 ソーシャルインクルージョンとは、社会的包摂（岩田、2010）と訳され、多様な人々を受け入れられる社会の在り方や、人と人とのつながりの再構築の重要性が包含されている。この理念は、我が国の少子高齢化の打開策として重要であると国が推奨し、新潟県では、すでに新潟市と住民の協働事業でモデルハウス「実家の茶の間“紫竹”」などで実践されている。

本研究の目的は、「実家の茶の間“紫竹”」の場に埋め込まれている“つながり”の構造要因を明らかにすることである。なお、本研究は平成30年度新潟市医師会地域医療研究助成金を得て行った。

【方法】 研究デザインは①質的記述的研究および②KHコードである。今回は①の方法による結果のみを発表する。研究協力者7名（主宰者2名とお当番さん1名、自治体および社会福祉の職員3名）へのインタビューを行い、逐語録化したインタビュー内容をデータとした。

研究者数人で意味が取れる最小単位でテーマに関する内容を要約し、類似性、相違性を比較・検討しながら抽象度を上げてサブカテゴリーを形成し、その後にサブカテゴリーの内容をさらに抽象化して、最終的にカテゴリーに分類した。

本研究は新潟医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得た(17831-170607)。データ収集に際して、研究協力者に対してはいつでも研究を中止できること、結果の匿名性及び個人情報保護に努めること、本研究の結果報告書および学会等に公表することについて説明を行い、同意を得た。助成金を受けた新潟市医師会とは利益相反はない。

【結果】 研究協力者は、主宰者2名、お当番さん1名、新潟県職員1名、新潟市職員1名、社会福祉協議会1名、作業療法士1名の計7名、男性3名、女性4名であった。年齢は20歳代から70歳代、平均年齢は約40才代であった。

以下、「 」はそれぞれの語りを、{ }はカテゴリーを示している。

主宰者2名からは{助けてと言える}{自分らしくある}

{自然な絆}{生きる気力}{あいまいさに耐える}
{自己決定できる}の計6つのカテゴリー、お当番さん、および自治体職員からは、{集まった人の中から生まれた自由な役割}{役割遂行の有能感や意欲}{多様な人が来ることに慣れ}{自由性のある人間模様の中で多様な考えが出やすい}{知恵のある当番さん}{当番さんから発信される居心地の良さが循環}{仕掛け}{プライベートを聞き出さない程よいルール}の計8つのカテゴリーが抽出された。

【考察】 多様な人を排除しないで受け入れるという理念がある一方で、ソーシャルインクルージョンには、集団外の人への排除や集団からの過度の欲求、強すぎる規範・強制的なメンバーの平均化（Portes,1998）という負の側面もある。本実家の茶の間には、それを解消するような多様な{仕掛け}が包含されていた。{プライベートを聞き出さない程よいルール}や「どんな人が来てもあの人誰という顔をしない」等の張り紙をしてルールを提示し、強いつながりによる排他性を回避するため、参加者に周知徹底されていた。主宰者の理念を実現するため{知恵のある当番さん}はそのルールにのっとり、疎外感を感じさせず、かつ、自由性を保てるように配慮していた。

制度やサービスは、時に人の弱さ、困りごとの解消として「助ける人」と「助けられる人」を作ってしまうがちであるが、本実家の茶の間では、{集まった人の中から生まれた自由な役割}をそれぞれが主体的に行っていた。

また、「誰かに会いに行きたい」「行くところが欲しい」という素朴な思いを叶え、かつ孤独に耐え、心身を健康に保ちながら生きつづけるためには、主宰者の語りに在るように「生きててもいいよ」というメッセージをもらえる場が必要である。それは、{助けてと言える}場であり{生きる気力}を充電する場であり、{役割遂行の有能感や意欲}が持てる場である。それらは、{当番さんから発信される居心地の良さが循環}することで支えられていた。

さらに、弱さとしての紐帯が効果的なネットワークを創る可能性を持つといわれるが、本研究結果から、{自由性のある人間模様の中で多様な考えが出やすい}、すなわち、“ほどよいつながり”そのものが、新しい情報やリソースへのアクセスを効果的に行えるという実例が多くあった。

今後は、この{仕掛け}が、具体的にどのようなものであるのかについて、参加している市民へのインタビューを通して明らかにしていく予定である。

【結論】 1. 本県における「実家の茶の間 紫竹」においては、“ほどよいつながり”の中で、多様性を認め合い、他者を排除せず、参加者同士の助け合いが実践されていた（ソーシャルインクルージョン）。

2. 「実家の茶の間 紫竹」における“つながり”の基本的な構造要因は、多様な【仕掛け】によって組み立てられていた。